
黒が居る

ういんすとん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒が居る

【Nコード】

N1001L

【作者名】

ういんすとん

【あらすじ】

健全な男子高校生の壘るいは幼馴染の紗月みやづきの仕事を手伝って生計を立てている。が、この仕事は普通じゃない。……どうやらまた何か面倒なことが起きているようだ。

まったくの見切り発車で作者もまだ先が読めません。書きながら設定を付けていこうとしています。

こんな書き物ですが温かい目で見てくださいると嬉しいです。

第一話（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません。

第一話

鐘の音、誰もが待ち望む解放の音色が響いた。

仕方なく俺は重たい頭を持ち上げる。周囲には既に我先にと立ち去る人影やいくつもの集団が見える。あちこちからどっか行こうぜ、なんて声が聞こえてくる。

元気のいいこった、と毒づきながらも荷物をまとめていると、目の前に影が映った。

「よう、罌るい。お前、今日一日寝てたな。よくそんな寝れるわな」
透みかたがなにやら呆れ顔でそんな挨拶をしてきた。

「昨日、寝るの遅かったんだったんだよ」

俺はまだ覚醒しない頭で律儀に返してやる。

「紗月ちゃんでもよろしくやってたんだろ。いーね〜若いってのは」

こいつはいい顔してるくせに、たまにおっさん臭いことを言う。

俺は呆れながら言い返そうと

「んなわけないでしょー!!」

怒声と同時に透が横にふっとんだ。

どうやら近くにあった机に突っ込んだようだ。辺りが悲惨なことになってる。

この惨状を作り出した犯人、紗月は振り抜いた体勢で未だに透を睨んでいる。

……本気で打つなよ、本気で。

俺は車に引かれた蛙の様な格好で伸びている友人に黙祷を捧げた。まったくこいつは、冗談が通じない。この前もちよつとからかったら鞆がものすごい勢いで飛んできた。見た目はかなりのものなのに、あの手癖の悪ささえなければ。こればかりは昔から変わらない。

ああ、なんともつたいない……。

はてさて、動かない透に殺気を飛ばすのにも飽きたのか、鬼姫はこ
つちを振り向き、

「墨、今日も仕事あるから！七時にいつものところ！じゃあね！！」
それだけ言い切ると返事も聞かずに教室から出て行った。ドス、
ドス、なんて効果音が付きそうだ。

「って〜。まだひりひりする」

透が左頬を擦りながらぶつぶつ言っている。

「まっ、タイミングが悪かったな」

俺はそんな透を流しながら、辺りを見るとなく見てみた。あれか
らこいつが復活するまでちょっとばかり時間を喰ってしまった。お
かげでもう校庭には後片付けをしている部活も見える。まあ時間
は間に合うから平気だろう。

こんな感じで俺たちはいつも通りくだらない話をしながら帰って
いたんだけど、

「そっいやお前、よく仕事がどうとか聞くけどなんかやってんの？」

透が思い出したように訊いてきた。

「まあ紗月の手伝いで、ちよつとな」

「……ふ〜ん、でもまあ程ほどにしとけよ。」

透はなにやら逡巡して、珍しく心配してきた。

「おっ、どうした、明日は雪か？」

「アホか、今は五月だったの。……まあ、最近お前やつれてる気が
するからな」

「ん、そーか？サンキュ、気いつけるよ。」

後ろ手に振りながら透と別れた。

午後七時、五月も半ばで暖かくなってきたとはいえ、夜はまだ半
袖では少し肌寒い。

俺は近所の公園で幼馴染の少女を待っている。あいつと待ち合わせる時は大体いつもここになる。閑静な住宅街とやらにある、小さな公園だ。家同士はたいして離れていないのだが、なぜか昔からあいつがよく呼びつけるから自然と待ち合わせ場所になった。

今夜は月がよく見える。風は無く、世界は止まってしまったのだからか。遠く人工の光だけが瞬く。そういえばあの日もこんな夜だった。……いや、よそう。

「おまたせ！」

突然後ろから声をかけられた。危うく声を出しそうになったが、努めて冷静に振り向く。

そこには、上質な絹のような長髪と鋭くもやさしさが観える涼しげな眼を持つ天使が微笑んでいた。月に照らされたその姿がさらにその神性を高め、神話の世界に迷い込んでしまったのか

……危うく魅入ってしまったところだった。長いこと一緒にいて、もう慣れたものと思っていたが、どうにも最近耐性という障壁が突き破られそうになることが増えた気がする。徐々に少女から女性に近づいてきたことが原因なのだろうか。

「わざわざ後ろに回るなよ、紗月」

な、なんとか普通に対応することができた。

「驚いた？」

「いゝや、全然」

実は結構。いろんな意味で。

「ちえ、つまんないの」

なんて拗ねながらそっぽ向いてしまった。

おいおい、……まだまだ子供らしい。

「で、今日は何なんだ？」

俺は俺を落ち着けるためにも、話を進めた。

「ああそうね。三丁目のビル、分かるわよね。今日はあそこの掃除
よ」

「え、あんなデカいやつ、2人でか？」

「しょうがないじゃない。人が足りないんだし」

「……拒否権は？」

「ありません」

俺はため息を一つ、歩き出した紗月に続いた。

大谷ビル、三丁目にあるこのビルは、何でも大谷グループとか言う昔それなりに幅を利かせていた会社が建てていたらしいが、工事中に事故が多発し工期が延びに延びていたとき、例のバブルとやらでグループの方に莫大な負債ができてしまい、工事は中止になってしまったらしい。元々は四階建てのレジャー施設を計画していたらしく、敷地も建物も結構な大きさだ。型は既に出来ており、それゆえ取り壊す費用もそれなりに掛かるため放置されていたらしい。しかし、こんな広い土地を遊ばしておくなんて、この街もまだ余裕があるらしい。ちなみに大谷グループは倒産したらしい。熱狂の時代つてのも怖いものだ。

「でかいな」

俺は誰に言うでもなく呟いた。

「そうね、出来ていればこの街の一番のレジャースポットだったでしょうからね」

「そして俺は毎日のように連れ出されここが嫌いになる、と」

「ん、誰に？」

「お前だよ」

近所にボーリング場が出来たとき、俺はこいつに毎日、ほんとに毎日ボーリングに連れて行かれ毎日腕が動かなくなるまで付き合わされた。あれは大変だった。歯も磨けなくなるなんて。腕が上がらなくなるんだ。やりこんだ結果、プロになれるかもしれないレベルまで上達したが、おかげでボーリングの球を見るのも嫌になってしまった。これは最近の話で、昔のことを話したら切りがない。こいつにどれだけトラウマを作られたか……。

「私、罍が何を言ってるのかよく分からないわ。さあ、もう仕事し

ましよう」

紗月はなにやら急にブリブリした調子で言い放って、ビルに入っ
ていった。あいつがなにか変なものでも食べたのではないかと少し
心配だ。

「ったく。しょーがない、働くか」

諦めて、俺も続くことにした。

ビルの中は無駄に広く、剥き出しの鉄筋コンクリートが月明かり
で凍っていて、その静かな闇夜はそこはかとない不安を駆り立てる。
ここに一人で居続けるのは俺でもごめん被りたい。

「なんか、変ね」

階段を二つほど昇った頃、紗月が呟いた。

「ここに到るまでなんの異常もなし。私達にまで廻ってきたのに、

……こんなこと」

「たまにはあるんじゃないの。俺も楽で助かるよ」

正直、俺にはよく分からないが仕事が楽に済みそうで、これは嬉
しい。

「また、あんたは。これがどれだけのことが分かってんの？」

「分かってるけ」

ラ シ。カ ダ イ。 ラダ シイ。カ ダホシイ。

「っ！！」

気付いた時には囲まれていた。気配など微塵も感じなかったが。
突如現れた亡霊たちは怨嗟を振りまき、周囲を徘徊しながら次第
に近づいてくる。

「紗月！」

俺が言うまでもなく紗月は動き出していた。その手にはどこから
取り出したのか鋭く光る刀が納まっている。目前に迫ったそれに、
振り下ろす

一閃。

一刀の下に切り捨てた。さらに一步、切り上げ、袈裟切り、進み横薙ぐ。

流石だ。あの、舞うように繰り出す鋭い刀閃はいつ見ても惚れ惚れする。

やつらは、隠行には驚いたが、たいしたことはないようで、このまま任せておいても平気だろう。しかし、いくら紗月でもあの数に一人では疲れるだろう。後でドヤされるのも困る。さて、

「やりますか」

俺は上着の内側から鉄の塊を抜き取り　すかさずぶつ放した。

啻、爆音が響き、正面に居た怨霊をこの世から旅立たせる。

瞬間、右方から津波の如く押し寄せる。

「ちっ
」

怒、ど、度、土、ド、怒、ど

亡者達が爆ぜ消える。

「こりゃ、ちと多いな」

俺は身を躲しながら後ろを流し見た。

おいおい。

俺は紗月に照準を向け

刹那、紗月の背後に迫っていた怨念の塊が爆ぜた。

「感知^{わか}ってたわよ！」

瞬時に怒声が飛んできた。

……どうやら随分とご立腹らしい。敵が味気ないせいだろう。紗月の突っ込んだ辺りは既に壊滅しそうだ。この幼馴染は一度スイッチが入ってしまうと、好戦的で、どうにも破壊活動の嗜好が強過ぎる。下手すりゃ味方にも目が向くかもしれない。強者を望むのは結構だが、そいつに殺されるのなら本望なんて思っていないで欲しい。本気で。まあそんなことはさせないが。しかし、あまり長くこいつらの相手をさせるのも危険だ、俺が。早々に片付けるに限る。

俺は鉄の塊、黒い装飾銃を構え、掃討体勢に入る。目を閉じ、総

てを察知する。

見るで無く、視る。

撃鉄を起こし、引き金を絞った

鈍、一拍遅れ連続して聞こえたそれは、終演を意味していた。

広い室内には既に俺と紗月しか居ない。

「罌、あんたやるならやるって言いなさいよ」

紗月が文句を言ってきた。でもそんな怒っているようでもない。
正解だったようだ。

「ん、ああわりい」

俺は周囲を見廻しながら答えた。

「にしても、久々に見たわね。あの全方位射撃」

紗月は話しながら背を向けて浄化の準備をしている。

「数が多かったしな、あれが一番早い」

「まあこんな室内じゃ派手なことは出来ないしね。でも毎回思うけど、よくあんなただの連射であそこまで出来るもんね。」

「それは、褒めてんのか、貶してんのか？」

「一応褒めてるわよ。」

俺はそりゃどうも、と適当に流した。

「よし、完了！」

どうやら浄化が済んだらしい。紗月は手を払いながらこちらを向いた。

「にしても、あいつらなんだったのかしらね。あんたが気づかない程気配を消せるなんて……」

俺もそれはずっと気になっていた。ああいった亡霊みたいのは知能もなく、見境なく周囲の生物を襲うだけである。普通こんなことにはならない。やつらが現れた辺りを探ってみたが、何の痕跡もない。少し面倒なことが起こっているのかもしれない。まあしかし、手懸かりも無さそうだ。ここで考えてても進展もないだろう。

「まあとにかく、もう帰りましょ。いつまでもこんなところにいる

趣味はないわ」

紗月も同じ結論に至ったらしい。

「そうだな、帰るか」

とりあえずは仕事も終わったことだし、後回しにしよう。どうやら今日はゆっくり眠れそうだ。これは非常に嬉しい。このビルからは歩いて十五分ほどで家に着く。風呂入って、飯食って、寝よう。今日はいいい日だ。明日は真面目に授業を受けよう。そうしよう。

「ああ、そういえば！」

もう家も近く、別れる辺りまで来た頃、紗月が急に声を上げた。

「ん、どうした？」

「そーそー、お父さんが罫にはもう一件頼むって言ってたわよ」

「……はい？聞いてないんですが」

何を言い出すのだろう、こいつは。

「ごめん、言うの忘れてたわ。何でも絶対に来て欲しいって」

「ちょ、ごめんで済むか！忘れるようなことじゃないだろ！てか俺には？お前は？」

「罫、知らないの？」

紗月は後ろに手を組み、腰を掲げて上目遣いで訊いてきた。

「……何をだ」

少しフリーズしそうだった。

「女の子にはね、夜更かしたのは最大の敵なのよ。はい、詳細はこれに書いてあるから。じゃ、がんばってね」

紗月は笑顔で走り去った。

……。

「ノオオオツ！！」

俺は、明日も放課後まで寝ることを決意するのだった。

第一話（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

ド素人が見切り発車で書いてみた駄文ですが、どうだったでしょうか？

意見や感想など頂けると嬉しいです。

第二話

五月も終盤に入り、雨の日が多くなってきた。もうすぐ梅雨入りだと云うから、そういうことだろう。

俺こと広江壘ひろえりはお天気お姉さんの笑顔に一日の活力を分けて貰いつつ、彼女が指している傘の絵に少し気持ちが萎える。今日も太陽の奴は休みらしい。どこかでバカンスでもしているんじゃないかなるか。

ふと、目の前のテーブルに無造作に置いてある数枚の書類が目に入った。

そう云えば昨日、紗月が今日も仕事が入っていると聞いていた。雨の日くらいは休みにして欲しいものだ。それでなくとも最近は何日のように舞い込んでくるのだから。俺に廻って来るといことはどうせまた掃除なのだろう。

……掃除、ね。何でも昔の人が世間様に知れないように隠語として用いたらしい。この世ならざるものを排除して現世うつしよを綺麗に浄化することからなのだろう。ニュアンスとしては間違っではないが、たいてい荒事になるから勘弁して欲しい。部屋の片付けくらいなら喜んでやるのに。

それにしても、最近多すぎる。そもそも亡霊や異形ってのは普通、偶発的に怨念の寄り集った歪みなどから自然発生するもので、こんなに毎日のように出てこない筈だ。とすれば、考えられるのは人為的な方法で呼び込んでいるというのが濃厚である。この間の隠行の件もそう考えれば筋が通る。紗月の親父さんもこれには同意見のようだった。まあそれが人間なのかどうかは分からないが、どちらにしろ良からぬ事を企てている輩がいるようだ。……全く、こんな季節にやらなくてもいいだろうに。

などとブツブツ考えながらも、俺は家を後にした。

見上げる空は曇り模様。昼過ぎから降ってくるらしい。

逆に考えれば、それがどこか今の気分を代弁してくれているように、俺の足取りは少しだけ軽くなった。

教室に入り窓側の、自分の席に腰を下ろすと見慣れた顔がよう、なんて言いながら寄って来た。

俺も適当に挨拶を返す。

その後、昨日の野球の話などをしていたのだが、

「そう云えば、聞いたか、墨」

なんて透が思い出したように切り出して来た。

「また幽霊が出たつてよ。今度は酒屋のおっさんが見たんだとよ。なんでも夜の十一時くらいに店を閉めようとシャッター下ろしてたら通りの奥の方に首だけの女が見えたんだと。この街最近おかしいぜ。こりゃそろそろ笑い事じゃなくなってきたな」

と思ったら一気に捲し立ててきた。

よく耳を敬そはだてれば他のクラスメイト達も似たようなことを話題に話し合っている。

そう。最近の連続大量発生で一般の人達にも目撃者が続々出てきてしまった。最初は笑い話だったがこうも続いてしまうと次第に話が信憑性を帯びてくる。最初に発覚してから既に半月程、殆ど二日に一度くらいの間隔で目撃されている。幸い、皆すぐに逃げたように怪我人は出ていないが……。

本来、こういった怪異の秘匿も掃除人の義務の一つで、普段は人目に付く前に片付ける。随分前の政府が無用な混乱の防止の為に治安維持の為にとかで内々に処理するようにしたらしい。しかし、ここまで大量だと如何せん捌ききれないものも出てきてしまう。元々、こんなことに対応する程の人員は配備されていないのだ。それに伴って、そろそろ増援が来るという話だが、紗月の親父さんら上の人間はそれより前に収拾を着けようと血眼になって首謀者を探している。他所の人間の力を借りるのは恥とか、そういうものだろうか。

「またか。全く、なんなんだろうな」

そろそろお前の所にも来るかもな、と冗談交じりに付け足し、俺は笑った。

透も有り得る話だ、なんて笑っていたが担任が来たのを見て席に戻っていった。

誘われて、いつもと違う場所で昼飯を食べることになった。

場所は第二校舎の屋上で、周囲には俺たちのような男女の二人組みがそれなりに見られた。

俺は購買で買ったカツサンドの袋を破きながら辺りを観察している。

「私たちもそう見えるかしらね」

左隣に座った紗月が視線は前のままに呟いた。

「まあ見えるんじゃないか？」

俺は努めて冷静に答える。

そうね、と紗月は満足げにしている。

……こいつ、まさかこれがしたかっただけか。

こいつはたまにこういった何々ごっこをしたがる。

しかし、その予想は次の一言で見事に裏切られた。

「罊、拙いわよ。皆最近あーいった話題で盛り上がっているわ」

紗月は表情はそのままに、音量を落として話しかけてきた。

……何かと器用な奴だ。

まあ当然、目撃者の件についてだろう。こちらとてその話だと思

って、わざわざ屋上までついて来たのだ。そうじゃなければ隣の校

舎の階段を五つも上がらずにいつも通り教室でいい。

「こう次々に来ちゃな」

俺は憎々しげに言い放つ。

「お父さん達も首謀者を必死に探してるけどなかなか見つからなくて、どうにもお手上げかもしれないの」

「へ？本気で？」

「本気で。遠見の得意な人が街中視たけどさっぱりだった」

紗月は外国人のように掌を見せて肩を上げて続けた。

「で、明日からちようど土日じゃない。それで、ね？」

微笑んで見てくる。

なにか凄く嫌な予感がする。

「罫に街中探し回って欲しいんだって」

「頼む！現状を打開できるのは君だけだ！」

紗月の親父さん、誠二さんは頭を下げながらそう言った。

少し急展開過ぎて俺にはついていけなかつたりする。

本日の業務を終えて報告に来たところ、いきなりこんな状況になった。

「ちよつ、やめてください」

さすがにこいつは困る。

「君以外に頼れんのだ」

誠二さんは頭を下げたまま、そう搾り出した。

昼休みに紗月が言っていたことは冗談であると、冗談であって欲しいと願っていたのだが、そうだった様子ではない。

「我々の情報網には当たらず、遠見で探れず、時間もない。原因はおそらく隠行だろう。となると、残る手札は君しかおらんのだ。罫君、君の気配察知能力ならば発見することも可能だろう」

誠二さんは顔を上げ、真っ直ぐに俺を見据え一息に言い放つ。

たしかに俺には、自分で言うのもなんだが、高水準の気配察知能力がある。余程高レベルの隠行でないと俺に隠し通すことは出来ない。ただし、それは俺が気を張っている時だけだ。張って無くてもある程度はいけるが……前回は何事もなく終わりそうだったので気が弛みまくっていた。おかげであんなことになってしまったのだが……可能性はあるでしょう」

俺は仕事用の言葉遣いで続ける。

「ですが、それは……」

「今まで通り、紗月をパートナーに付ける。今回、君は発見後は対象に接触せず応援を待てばいい」

言葉を遮られた。

問題はそういうことではない。

この際だ、俺は直球に訊いてみた。

「それは、私が町内総てに探査をかけるということでしょうか？」

「そうだ。物分りが良くて助かる」

間髪入れず返答がある。

「ああ！本気が、この親父！」

明々後日には増援が来るらしい。つまり、俺は街中を常に気を張り詰めながら隈なく搜索し、二日以内発見しなくてはならないというのだ。……なんとという無茶振り。

「目標の達成は保障しかねますが……」

「我々は君の力を信じている」

……。

もう、何を言っても覆ることは無さそうである。

諦めながら頷き、俺はその場を後にした。

項垂れながら帰宅していた俺の前に一つ影が映る。

「いよつ。元気ないねえ」

公園の入り口の衝立ついたてに座っていた紗月が笑う。

「これでどう明るくいけと……」

「物は考えようだって。明日から二日連続で私と居れるのよ。そうね、どうせだからデートだと思えばいいわ」

紗月は非常に愉しそうに言う。

「デート、ねえ。今さら、お前と〜？」

「いいじゃない。ねえ、なんか考えてきてよ。たまにはそういうのもいいでしょ」

紗月は妙に愉しそうだ。……まさか、ね。

「でも……結構切羽詰ってんだろ？」

「いいのよ。こんな状況じゃ誰も責められないし。結局、責任取るのはお父さんだしね。墨が背負いすぎるものでもないわ」

紗月は軽い調子で答える。

「いいのよ」

「いいの」

約束ね、そう言って紗月は俺が来たほうに歩いていった。

はてさて、どうしたものか。

あいつの言うとおりに捉えていいものか、しかし、これはそんなに軽い問題でもない。かと言って焦っても解決するものでもないだろう。……あいつはそういうことを言っていたのだろうか。

「ははっ」

俺の足取りは大分軽くなった、気がした。

第二話（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

ご意見、感想をお待ちしております。

次回はやや間が開くかもしれませんが。

連載してすぐで申し訳ありませんが、優しく見守って頂けると助かります。（汗）

第三話

「そろそろ休まないか？」

俺は道端の生垣に腰を下ろしながら、そう提案した。

「何言ってるの。まだまだ回るところがあるのよ」

紗月は腰に手を当て、呆れた様子でこちらを見ている。

「流石にちよつと疲れたよ。お前も喉でも渴いてないか？」

「うーん、仕方ないわね。じゃ、そこに入りましょうか」

紗月はすぐ傍にあつた喫茶店を指差した。

土曜日の午後三時過ぎ。昨日とは打って変わって、本日は晴天である。

俺たちは朝方、大体九時頃に出発したのだが、現在の収穫はあいつのトートバッグからひよっこり顔だけ出している虎のぬいぐるみだけだ。

昨日のは俺の気を揉んでくれた、という訳では無かったようだ。本当に朝から遊び回っている。街にあるデパートを制覇して、ゲーセンを梯子させられた。有言実行とはよく言ったものだ。紗月の為にある言葉だったのかもしれない。

おかげで、掃除の方は今の所、殆ど成果を挙げていない。

ルコールはアンティークな喫茶店だった。

時間帯のせいだろうが、客の数は少ない。

店内は仄暗く。それが一層雰囲気を引き立てている。

壁には四角い窓が四つ穿うがたれていて、照明はそこからの陽射しだけだった。

窓から覗く明かりで四つだけ、四角く切り取られた別世界のよう

な空間になっていた。その一つ、店主の趣味がカウンターに並んで佇む西洋人形達はその世界で眩しそうにしている。

俺は注文したアイスコーヒーで喉を潤しながら、感情豊かに話す紗月の、父親の唐揚げの話の流れし聞いていた。

「なんて言うのよ。ひどくない？ん、聞いてる？」

俺はああ災難だったな、と返した。

それを聞くと紗月はまた話し続ける。

俺はたまに相槌を打ったりやそれらしいことを言ってみたりする。紗月はよく喋るから、大体いつも俺は聞き役に回っているのだ。

……しかし、どうしたものが。

こんな風にこのまま遊んでいるのもいいが、しかし、今回の件はなかなか大事おおごとである。働くものも働かないと流石に紗月の親父さんも困りきってしまうだろう。

俺は話の終わりを待って、切り出した。

「なあ、もういい加減ちゃんと調査しようぜ」
すると紗月は、

「ん、ああそれね。大丈夫よ。一応、考えがあるわ」

なんて、事も無げに言ってきた。

「はい？」

思わず声が出てしまった。

「だから大丈夫だって。任せといて」

まあここはもう出ましよう、と付け足して紗月は立ち上がった。

俺は今、この間の大谷ビルを再び見上げている。

時刻は八時を回ろうかというところ。今夜は雲に隠れて月は見えない。

結局、あの後も散々引つ張りまわされたのだ。

「そろそろ教えてくれてもいいんじゃないか？」

俺はそう問いかけた。

なにかの紙を取り出し出していた紗月はそうね、と呟いた。

「これ、見てくれる？」

紗月は取り出した紙を広げて渡してくる。

「ああ。これは……見取り図か。このビルの、だよな？」

ええ、と首肯して紗月はある一点を指差しながら続ける。

「あの後、一応私も調べてみたの。とりあえず資料だけだけど」

「B1F？ん？そんなのあったっけ？」

「いえ、前は気付かなかったわね。……でも、だから、おかしい
と思わない？」

そうだ。前回、俺達はビルの内部は全て見て回った。内部構造自体はそんなに見当たる点もなかった。しかし、地下があるなら普通、階段はあるだろう。それもあの広さなら利便性と防災用に複数なくてはならないだろう。今更、単純な見落としなんてミスをする程、呆けてもいない。ましてや、階段なんて大きなもの。ということは、「幻術か結界の類、か……」

「そういうこと。さらに、遠見で見えない。それは、なぜ？
今回の件は明らかに自然に発生したわけではないわ。なら誰かの
手が加わってるはずなのに。」

これは、相手は高レベルの隠匿系の術すべを持っているということに
他ならない。それが本人か、能力なのかも分からないけどね」

そして、と紗月は言葉を切り、ビルを見据える。

「私達が、隠行を使うなんて亡霊と対峙したのもここ。あんな件は
今のところ、私達しか遭遇していないの。……あれ程の隠行、そう
はないわ。確実に同一のものでしょうか」

「……名探偵、だな」

「なによ」

紗月は少し拗ねたように睨んでくる。

「怒るなよ。からかってるわけじゃない」

俺は苦笑しながら宥める。

「たしかに。いや、十中八九、それで間違いないだろう」
いい仕事をする、と俺は素直に褒めた。

紗月はこういったことに関しては、昔からなかなか鋭い洞察力がある。

こいつの旦那になる奴は絶対に浮気なんて出来そうにないな。

「当然でしょ。私を誰だと思ってるのよ」

そんな俺の思惑も知らず、紗月は嬉しそうに胸を張っている。

「へへへ。御見逸れしやした」

俺は冗談交じりに頭を下げておいた。

「よっし。じゃとりあえず探すわよ」

紗月は満足そうな足取りで先導していった。

俺は見取り図とその場所を見比べる。位置はここで間違いない。
のだが、

「……」

俺たちは二人揃って呆れていた。

目の前には罅ひびの入ったコンクリートの壁が佇んでいる。

普通、こういった結界というものは認識を阻害するというのが定番である。しかし、そういったものは生物の無意識に作用して意識をずらすため、例えば、そこに行くと目的を持ってしまえば無効化される。

ということは、これは、多重に結界を張っているということだ。

しかも、これは不可視の幻術。たしかに隠匿の効果は高いのだが、こいつは発現に半端ではない労力が掛かる。そのくせ、脆い。というなかなか贅沢な代物だ。結界一つでもそれなりの労なのに、これは……。呆れるのも致し方ないところだ。

余程の何かがあるのか、それとも妙に慎重なだけか、出来るなら

後者であって欲しい。

「ま、いいわ。じゃやるわよ」

言って、いきなり紗月は虚空から刀を取り出した。

「ちよっと待て、誠二さんに報告しに行かないのか？それは流石にバレルぞ」

そうじゃなくても今回は偵察だけという話だ。今日は妙に疲れたし、ここいらで仕舞いにしたい。

「どうせ報告に戻っても、また来る羽目になるわよ。人足りないんだから」

間髪入れず、俺の淡い期待を粉碎する一言が告げられた。

……有り得る。現状は援軍が必要なほど人手不足だ。なぜそこまですれに至らなかったのだろう。考えれば考える程、その可能性しか出てこない。いやしかし、希望は無為に捨てるものではない。

などと、俺が思案している内に、紗月は刀を振り下ろしていた。

刀は不可視の結界を切り裂いた

否。

その直前で別の何かに弾かれた。

「いた〜い。もう、なんなのよ」

紗月は苛立ちを隠そうともせず喚いている。

物理遮断だ。まさか、ここまでするとは……。

「待て、こいつはお前じゃ、ちと苦労する」

俺は再度切り掛かろうとする紗月の肩を掴んで下がらせる。

「俺に任せとけ」

どうせ今のでバれてしまっただろう。

俺は、覚悟を決めた。

手に装飾銃を具現化、召喚する。

精神を研ぎ澄ませる。狙いは一点。結界の、接合点

禁、とビル内に甲高い音が響いた。

数瞬の後、灰色の壁面が硝子のように碎け散った。

「明かりがあるわ」

紗月は階段の入り口から覗きながら言った。
元から電気は通じてあったのか、はたまた、最近通したのか、どちらにしろ明かりがあるのは助かる。

「流石に真つ暗は嫌だったんだろ」

軽口を叩きながら俺も覗いてみる。

階段の壁に備え付けられた電燈は明滅を繰り返し、その命を振り絞っている。

どうやら元からあったものを使っているようだ。

階段は途中、おそらく中間点で折り返されており、先は見えない。

「んじゃ、行ってみよう。やってみよう」

紗月はこちらを向き、愉しそうな顔を見せる。

頷いて、俺は階段に足を進める。

紗月はちよつとした冒険心からか、これから戦闘になる可能性が高いことからか、随分と高揚しているようだ。

俺はというと、何やら、嫌な予感がしていた。

第三話（後書き）

読んでくださってありがとうございます。
ご意見、ご感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1001/>

黒が居る

2010年10月14日14時29分発行